

佳作

『命』をつなぐ夢

北海道 留萌市立留萌小学校五年 伊藤 灯里

わたしは、この夏休みに『元気ミルク大学』に参加してきました。『元気ミルク大学』というのは、全道各地から集まる小学五、六年生の仲間達と、大学の先生や大学生と一緒に北海道の牛乳や酪農について学ぶことのできる大学です。

わたしはこの大学を知ったときどうしても参加したくて、こんな作文を書いて送りました。

「わたしは将来獣医になりたいと思っています。理由は七年前まで飼っていた雑種のポク^{ポク}という犬がいなくなってしまったことがきっかけでした。ポクはわたしが生まれるまえからいるわたしのお兄ちゃんでした。わたしはポクがいたときは動物関係の仕事がしたいとは思っていませんでした。だけどポクがいなくなってからは少しでも多くの動物を助けたいと思って『獣医になろう!』と決

めました。わたしは獣医になるために酪農学園大学にいった勉強し、ポクみたいな動物を助けたいと思っています。そのために『ミルク大学』では牛のことも知っておきたいし、初めての酪農体験や工場見学、そして新しい友だちと一緒に生活することを楽しみにしています。」

待ちに待った七月十一日、わたしは四十人の生徒に選ばれ、夢の酪農学園大学での三泊四日が決まりました。

八月九日から十二日まで行われたミルク大学で、わたしの心に強く残ったことが二つあります。一つ目は牛の第一胃という胃の中に手を入れたことです。胃の中はすごくおくが深く、胃のかべにさわることはできませんでした。でも、胃の中はあたたかくて『生きている』ということが手ぶくろのむこうから伝わってきました。

そのあと、胃の中にいるびせいぶつについて調べました。牛とびせいぶつはおたがいに相手が生きるために必要な働きをして協力し、命を支えあっていることを知りました。

二つ目に心に残ったことはさくにゆうです。わたしはさくにゆうをするのが初めてでした。牛のもけ

いで練習したときはうまくできましたが、本番になると牛はもけいとはちがいうごいてしまうので、ミルクをしぼる機械をつけるのがとても大変でした。作業中、左のうでにガツガツとあたる牛のキックに、生きている牛の力強さを感じました。

わたしは、この二つの体験を通して、牛の『命』とふれあうことができました。そしてわたしは、その命の一部をもらい元気にすごしているということを知りました。

この夏休み、わたしの夢が少しだけ大きくなった気がします。わたしはいつかまた酪農学園大学にもどって、『命』をつなぐ仕事につきたいです。